



# くろがねの星乙女

Iron star "56" for Astraea



ジョバンニはばねのようにはね起きました。町はすっかりさっきの通りに下でたくさんの灯を綴<sup>つづ</sup>ってはいましたがその光はなんだかさっきよりは熱したという風でした。そしてたっ<sup>ゆめ</sup>たいま夢であるいた天の川もやっぱりさっきの通りに白くぼんやりかかりまっ黒な南の地平線の上では殊<sup>こと</sup>にけむったようになってその右にはさそり<sup>さそりざ</sup>の赤い星がうつくしくきらめき、そらぜんたいの位置はそんなに変わってもいないようでした。

——宮沢賢治「銀河鉄道の夜」



繞む木の枝から、どさりと雪の塊が落ちる。

草木<sup>そうもくもえいす</sup>萌動。人里では春の兆しが雪を割って顔を覗かせる季節だが、森はいまだ深い冬の中だ。

白い静寂に沈む山裾の道、脛が埋まるほどの深さの雪をざくざくと踏みわけ進む、場違いなほどに黒い装いの少女の姿があった。尖った三角帽子に乗った雪を払い落とすと、蜂蜜のように色の濃い金髪が揺れる。口元を覆う襟巻を外すと、白い息がほうと塊のように噴き上がる。

普通の魔法使い、霧雨魔理沙。流星のように幻想郷の空を駆ける少女の姿はいま、雪に沈む森の中にあった。

立ち止まった魔理沙は腰に吊るした水筒の中身を少しずつ口に含む。揺れて凍らずにいた茶は、氷よりも冷たく喉を滑り落ちていった。

「……ふう」

冷え切ったお茶も、雪の中を歩き続けて火照った身体には心地いい。じっとしていればものの数分で汗が冷えて、凍えてしまうだろうけれど。

懐炉代わりに動いている懐のミニ八卦炉を探り、魔理沙は息を整え、背の荷物を直して再び歩き始める。

幽かな清音の響きが歩みと共に近付いてくる。冬の装いを残す

玄武の沢は、九天の滝より続く雪解けの水を孕んで、いつもよりも勢いを増していた。

「……到着、と」

「遅いよ、盟友」

待ち合わせの場所には既に相手の姿があった。

この沢を住まいにする河童、河城にとり。いつもの作業服の上から褐色の防寒着にくるまった姿はまるで熊のようだ。河原に座り込むその傍らでは瓦斯コンロが青い炎をあげ、アルミのポットがカタカタと音を立てていた。

「よう、もう来てたのか」

振り返るにとりに、魔理沙は白い息を見せて笑う。

「待たせておいて良く言うね」

「途中でちよつと掘り出し物が見つかったな」

魔理沙は「こそ」とポケットを漁り、遅刻の原因となった寄りの成果を示してみせる。

大粒の水の鱗。水の張った泉の水底で見つかるこの宝石は、真冬の伊吹が冷えて凝った冬の魔力の源である。この時期にしか手に入らない貴重な魔法の品だった。

「まったく。凍えちゃうかと思ったよ。これだからこの時期、陸<sup>おか</sup>の上は嫌いだ」

「そんなに寒いならお前も山で暮らしたらいいんじゃないか？」

「あんな軟弱な連中と一緒にしないで欲しいもんだね」

山童と同じ扱いなんて心外だと口を尖らせるにとり。

彼女に言わせれば、これで案外と水の中は暖かいのだと言う。

氷が張る寒さに比べれば確かにそうかもしれないと、魔理沙は一入納得した。

「おお、これか？」

にとりの座る岩から少し離れた場所に立つ、四角い粘土の柱を見つけて、魔理沙は声を上げた。

河原の石をどけて均した地面の上に立つそれは、小型の粘土炉であった。土台には煉瓦、上部には排気の為のブリキの煙突が取り付けられている。既に長く火が焚かれているとみえ、表面の粘土は乾き、煤に汚れている。

感心する魔理沙に、にとりは腰に手を当てて胸を張ってみせる。「魔理沙が遅いから先に炉の方が完成しちやったんだよ。……んで、そっちの準備は？」

「このとおり、細工は流々だぜ」

魔理沙は再度懐を探って、外套の下から一抱えもある袋を引っ張り出した。明らかに服の下には納まりきらないサイズだが、魔理沙のポケットは「重底の魔法のバッグの原理で小さな亜空間になっっており、見た目とは無関係にものを収納しておけるように改造されている。」

魔理沙が袋を開くと、中には赤茶けた筒状の塊がぎっしりと詰まっていた。形状から狐の枕、あるいは見つかる地名をとって高師小僧などとも呼ばれる、褐色鉄の塊である。河原や水辺のある地域で古い地層から見つけることができ、太古の時代から鉱物資源として用いられてきた。

「御山の方ならいい砂鉄が取れるんだけどね……って、ずいぶん集めたんだね」

「甘く見て貰っちゃ困るな。菌糸の栽培は得意分野だぜ」

「え、これ拾ったんじゃないの?!」

「もちろんだぜ」

胸を張ってみせる魔理沙。にとりが勧めたのは河べりの崖などを歩いて、古い時代の地層から褐色鉄を集めることだったのだが、魔理沙はなんとこれを自作したらしい。

これらの鉄は水辺の稲や水草の茎を取り巻くようにして形成されるのが知られている。円筒形をしているのはそのためだ。

魔理沙は魔法の森の湿地に自生する葦の根元に、*Lepidodictys* 属 *Gallione* 属の鉄バクテリアを繁殖させて、水中の鉄分を水酸化鉄にして褐鉄鉱を作り出したのである。

言葉にすれば単純だが、鉄バクテリアによる褐色鉄の生成には非常に厳密な条件が要求される。気温の低い冬季にそれをしてのけるのは生半な労力で出来るものではないだろう。

「なんたって私がつくるものだからな。磁石引きずって砂鉄集めるより、こっちのほうがらしいだろ」

「……そうだね」

胸を張ってみせる魔理沙に、にとりは歯を見せて頷いた。「これなら、いい鉄が作れると思うよ」



「……鉄？ 鉄ってあの鉄だよな？ なんでまたそんなもん作りたいのさ？」

「できないのか？ 河童はそういうのが得意だって聞いたぜ」

いつも通り神社で開かれた十二回目の新年会。守矢の神様に挨拶に行った仲間たちと別れて境内をぶらついていたらにとりは、い

きなりやってきた魔理沙にそんな話を尋ねられ、面食らったように眉を寄せた。

「そりゃ、河城の大工房に製鉄炉はあるけどさ……。材料を分けてくれってことかい？」

「いや、私にその炉を使わせて欲しいんだ」

「……はあ？」

魔理沙の意図がつかめず、にとりはますます困惑を深くした。

技術に優れた河童は、製鉄にも深く通じ、集落の大工房には大きな鉄鉱炉を持っている。しかしそれは妖怪の山全体で運用計画が定められて厳重に管理されている。作業にかかわる人員も一人や二人ではなく、にとりの一存で動かすことなどできないし、部外者を割り込ませるなどもつてのほかだ。

「なんとかならないか？」

「そんなこと言ったってねえ……」

いつになく真剣な魔理沙に、にとりも言葉に詰まってしまう。魔理沙は魔法使いのくせに河童の技術に理解を示し、無縁塚から外界の道具を拾い集める変わり者だ。地底探検以来、意気投合して、にとりも何度となく一緒に実験をしたことがあった。

とは言え、今回はそう単純ではない。にとりはしばし腕組みをして考えを巡らせる。

「ううん……。あのね魔理沙。製鉄炉は無理だけど、別の方法で鉄をつくることならできるよ。これならそんなに手間もかからない」

「本当か？」

「他ならぬ盟友の頼みだからね、任せといて。それで、用意するものだけ……」

にとりが提案したのは、露天での粘土炉を使った製鉄であった。

最初は野焼きで鉄なんか作れるのかと懐疑的だった魔理沙も、にとりの説明を聞くうちにその気になったのである。かくして一ヶ月の間のふたりは準備に奔走し、今日の運びとなったのであった。

「じゃあ、さっそく始めようか」

にとりは魔理沙を伴って河原で火を上げている粘土炉へと向かった。炉の口をあげ、竹炭をさらさらと流し込む。赤熱した炭がさらに炎の勢いを増した。

永遠亭を取り囲む竹林から作った竹炭は、夜雀の鰻屋でも愛用しているという逸品である。不死鳥の炎で不純物を飛ばした炭は、非常に強い火力と持続性を兼ね備えていた。

「随分熱いな……」

「摂氏一〇〇〇度くらい出てるからね。魔理沙、手伝うよ」

「おう」

にとりからブリキの缶を受け取った魔理沙は、褐色鉄をさらざらとそこに投げ入れ、粉挽きの要領で潰し始めた。培養途中で混じり込んだ余分な藻や苔を取り除き、薬研に移してさらに均一になるように丁寧に搗り潰してゆく。

程なく、一袋の褐色鉄は小山のような粉末となった。

「よし。これで全部かな」

「あ、ちよつと待ってくれ」

にとりが鉄粉を炉の中にくべようとしたところで、魔理沙がそれを制した。

首を傾げるにとりの前で、魔理沙は作業用の革手袋を外し、小さなナイフで親指の先に浅く傷を付けた。

指先にふつと浮かぶ赤い血の珠を数滴、鉄粉に振りかけて、普

通の魔法使いははにっと歯を見せる。

「魔法の隠し味をちよちよいと、だな」

「人間って、変な事するんだねえ」

「お前だって、作ったものに署名ぐらい入れないか？」

「そりやそうだけさ」

言い合いつつも二人して粉を丁寧にとめ、火を上げる炉の中へと投げ入れる。

「よし。……あとは火だな」

にとりに領いて、魔理沙は懐のミニ八卦炉を取り出した。十日あまりかけて練った高密度連鎖燐核の丹薬を詰め込んで、粘土炉の底にセツトする。

発火性の強いシヤグマアミガサタケの他、数十種の茸や鉱石から成分を抽出して混ぜ合わせ、魔力を練り込んで作る燐核丹薬は、高速で燃焼することで高熱と強い閃光を吐き出す。魔理沙によるとこれは天を駆け、星の世界を行き来するロケットの吐く炎なのだという。魔理沙はこれに指向性を持たせて撃ち出すことで、マスタースパークの火力触媒としていた。

いまは持続性を優先して原料の配合を変え、長時間の火力を維持するように調整してある。程なくごうごうと炎を上げ始めた八卦炉が、粘土炉全体に火を回し、黒い煙を立ち昇らせ始めた。

煙突からの煙が徐々に色を薄くしていくのを確認し、にとりは額に浮いた汗をぬぐってよしと頷く。

「この炉のサイズだと竹炭が五キロばかり要るんだけど、それがないと済むのはありがたいね。炭素が減ればそれだけいい鉄ができるし」

「後は待つだけか？」

「そうだね、火加減をみるくらいかな。料理と同じだよ」

「任せる、得意だぜ」

「……意外だね、魔理沙も料理なんかするんだ？」

「馬鹿にすんなよ。乙女には必須のスキルじゃないか」

軽口を言いながら、二人は炉から少し離れた河原に腰を下ろした。とたんに押し寄せる川面の冷氣に、熱に炙られていた頬が心地よく撫でられていく。

気付けば時刻は夕刻。陽射しは山の向こうに隠れ、橙と紺の混じり合った油絵のような空が稜線を彩る。

「魔理沙、飲む？」

「ん、いただくぜ」

にとりがホーローのカップに淹れた珈琲を受け取り、魔理沙は熱いそれをそっと掌にくるんだ。冷たい川面の上、挽いたばかりの珈琲の香りと熱が身体の中に染み入るようだ。

煙の残り香に鼻を擦り、吐息。雪解けの混じる川面のせせらぎ、瓦斯コンロの蒼い炎の灯りの下で、にとりはしばし、珈琲の苦みと香りを堪能してから、隣の魔理沙に問う。

「ねえ」

「あん？」

ふうふうとカップを吹いていた魔理沙が顔を上げた。

「そろそろ教えてよ。魔理沙。どうして急に鉄なんか欲しいと思つたのさ。機械細工するには足りないし、修理なら私なりに頼めば済む話だよ。魔法かなんかに使うつもりだったの？」

「あ……」

魔理沙が軽く帽子のつばに手を添える。わずかに視線を隠すうなしくさは、彼女がなにかしら話し辛いことを口にしうとし

ている時の癖だった。

しばし、言葉を探すような沈黙を挟み、普通の魔法使いは話始める。

「特段、なにが作りたいってわけじゃなかったんだ。……まあ、鉄とか錫とか鉛とか、そのへんを使う魔法つてのがないわけじゃないが、私のはそういうんじゃない」

魔理沙はカップを傍らに置き、ごろんと仰向けに寝転がった。つられてにとりも空を見上げる。夕映えの空にはいつの間にか星の輝きが灯り、早々と天を彩っていた。

「前に、香霖とこの本で読んだんだ」

夕暮の空に燃える、蠍の紅い目玉。翼を広げた鷲。仔犬の蒼い瞳。光の蛇のとぐろ。高く歌うオリオンから、小熊の額の上、空の星巡りの目当てとなる極星へ。幻想郷の冬の空の輝きを指でつなぎ、魔理沙はゆっくりと詞を紡ぐ。

「惑星を除けば、こんな風に沢山ある空の星は、みんな自分で光ってる星だ。あいつらは遠い空の果てで太陽みたいに真っ白に燃えながら、いろんな元素を作ってるらしい。水素、酸素、ヘリウム、酸素、燐、硫黄……。何十億年、何百億年っていう時間をかけて、星は燃え続けて、最後に作るのが鉄なんだ。鉄は安定しててそれ以上燃えないから、重さに惹かれて星の中心に集まる。燃えるものが全部無くなった星は、鉄の重さに負けて圧縮されて、最後はどかん、だ。それが星の一生なんだとさ。

だから、鉄つてのは星の欠片なんだ。一生を終えた星が、歳以後の輝きのあとに残す骸だ。それをこの前ふつと思いついたんだ。それで、……私が星の一つも持つてないのはちょっと格好悪いなと思ったんだぜ。流れ星は歳の百倍は見てるが、まだ隕石は

拾ったことがないからな」

夜の帳が幾重にも重なり、空は闇を濃くしてゆく。ちかりと瞬く流れ星が、夜空を斜めに横切っていった。

「……そっか」

「ああ。……変か？」

「そんなことないさ、盟友」

魔法と鉄は相性が悪いという。けれど、星を好む魔理沙だからこそ、こうして鉄に特別な意味を見出したのかもしれない。それは、彼女だけの魔法といえるのだろうか、にとりは思う。

天を巡る星のくろがね。星乙女の穂先。成程、それは確かに、魔理沙の魔法の象徴なのだろう。

にとりは以前、一度だけ魔理沙の工房の地下にあるという、菌糸の培養室に入れて貰った事を思い出した。興味のあるものを積み上げる彼女の家の中で、そこだけは几帳面に掃除され、丁寧な温度・湿度管理をされていた。

いつも箒に空を走らせ、興味のままに幻想郷じゅうを駆け回る彼女は、きつとなによりも、日々の積み重ねを大切にしているのだろう。誰のものでもない、自分だけの魔法を掴むために。

「……ありがとな」

顔をそむけて、ぼそりと一言。

敢えて聞こえないふりをして、にとりはまだ熱い珈琲を啜った。



二時間はかりが過ぎて、あたりはすっかり闇に包まれていた。魔理沙の持ち込んだヒカリゴケのランタンの明かりの中、炉の炎の照り返しが紅く河原を染めている。

どんな作業であれ、明るいうちに済ませるに越したことはないが、今回は魔理沙の魔法のためでもある。星明かりの下でこそ相応しいと考えてのことだった。

にとりが火かき棒で粘土炉の下にある炉口を押し崩すと、そこからどろどろと凝った赤熱した金属が流れ出してくる。

「おお、これで完成か？」

「違うよ。これはノロって言つて、……まあ、鉄に残つてた不純物みたいなものさ。これくらいの温度じゃ鉄は溶けたりしないからね。いま炉の中に残つてるのが鉄の元になるのさ」

「けっこう無駄になるんだな……」

「だからたくさん必要になるつて言つたんだよ。最終的に製鉄の原料……銑鉄<sup>せいてつ</sup>になるのは全体の二割くらいあればいい方じゃないかな」

「おいおい、ずいぶん贅沢なんだな」

二キロの銑鉄を得るために、おおよそその五倍近い原料と、それと同じだけの炭が必要とされる。その上で実際に加工して鋼として使えるほど純度を保つのは、できた銑鉄のごく一部だ。

「だから、妖怪は鉄を嫌うんだよ。まあ、私は河童だからちよつと違うけどね」

妖怪の中には剥き出しの金気を嫌う者が多い。博麗の巫女が使う封魔針をはじめ、妖怪を退治する武器には鉄が用いられるのがほとんどだ。

鉄や金属の武器は人間の叡智の象徴である。生まれながらに牙

や爪を持たない人間が、知識と技術で膨大な手間を駆け、作り上げ、身に付けた武装こそが、昏き妖怪の棲む闇を斬り裂くものだからだ。

「なあ、にとり、お前ひよつとして、私に——」

「さ、魔理沙、もう少しだよ」

盟友の言葉を遮り、にとりは次の準備を始めた。

さらに一時間と少し。南の空に高らかにうたうオリオンが姿を見せ、炉を燃やし始めてから三時間はかりが過ぎた。炉が上げる煙が黒から灰色、やがて白に変わったところで、にとりは腰を上げた。

「そろそろ良さそうだね」

背中のアームを操作し、ミニ八卦炉の火を止め慎重に炉を引きはがしてゆく。千度を超える炉内は赤熱し、竹炭が顔をあぶる熱を引き出した。

「まだ熱いから気を付けて。火傷じゃ済まないよ」

「任せとけ」

魔理沙もヒクイドリの羽根で編んだ耐火手袋を嵌めて手伝う。粘土炉を押し崩すと、その炉の底には赤熱した鉄の塊があつた。不純物を燃やされてひとつに溜まった銑鉄——鋳である。

赤熱した片手に乗るほどの大きさのそれを、にとりはアームを使つて慎重に川面ちかくまで運ぶ。新型アームの耐熱テストも兼ねていたが、予想通りアームのいくつかが不具合を起こしているようだった。

「よし、いいぜ」

あらかじめ河原に深く掘った穴に、引き入れた冷水が満ちていある。そこに魔理沙が氷の鱗を投げ入れ、温度を低温に保つてい

るのだ。流れることを止めた水面には薄く氷も張っていた。

「せー、のっ！」

タイミングを合わせ、赤熱した鋤を水の中に放り込む。涼やかな水面がじゅうと弾け、猛烈な水柱を上げた。

赤熱した鉄がぐらぐらと水面を沸き立たせてしばし。ようやく鎮まると――川床には黒々とした鉄鉱石が出来上がっていた。にとりとはふうと額の汗を拭いて身を起こす。

「……上手くいった、かな」

「ありがとな、にとり」

すっかり一仕事終わった気配で、頬についた煤を擦る魔理沙。けれどにとりはわかってないなあ、とアームの指を立てて左右に振ってみせた。

「何言ってるんだい、こんなの里の人間だってふつうにやってることさ。河童が手伝ってこの程度じゃ金券にかかわるよ」

「あん？」

「魔理沙は本物の星の欠片が欲しいんだろ？ 今からそれを捕まえてくるのさ」

くすりと微笑み、にとりはできたばかりの鉄を拾い上げるとともに、背中のリュックから秘蔵の瓶を取り出してみせた。



「これでいいのか？」

「そうそう。重さの比は3対1でね。できるだけ均一に混ぜない

といけないから、偏りが出ないように細かくして」

鉄鉄を電動の工具で再び細かく削り、それを瓶の中身の銀色の粉と、重量比通りに攪拌する。言われるままに手伝う魔理沙の困惑が、少しばかり小気味いい。

河原の石をどけ、地面を掘って砂を敷き詰め、すり鉢状に形を整える。そこに小山ほどになった粉末を積み重ねた。慎重に周囲を確認し、火が燃え移るものがないかを検める。

「こりやいったいなにが始まるんだ？」

「河童の科学は世界一つね。魔理沙、はいこれ」

「なんだこりや。こんな夜に自分から鳥目になる趣味はないぜ？」  
渡された黒眼鏡をつまんでおどけてみせる魔理沙に、にとりはもう一つ同じものを取り出し、自分で鼻の上に乗せる。

「対閃光防御用。まともに見ると目が灼けるよ。……もう星が見られなくなってもいいってんなら、止めないけどね」

「それは洒落にならんぜ」

慌てて黒眼鏡をかける魔理沙をみて、にとりはアームを繰り出し、最大限に距離を伸ばしてゆく。穴から十分に距離をとり、地面に身をかがめた。

「魔理沙、離れててね、いくよ？」

「お、おう」

にとりのただならぬ気配を感じ取ったのか、神妙に頷く魔理沙。にとりはアームの先端に摘んだマグネシウムのリボンに火をつけた。しゅうしゅうと激しく火を上げるリボンを、穴の中へと放り込む。

刹那――

地面を叩き付けるような轟音と共に、弾けるように閃光が瞬い

た。白い火柱が上がり、太陽がそこに現れたかのような輝きが閃く。砂の上を鉄火がはじけ火の尾を引いてくると踊り、次々に閃光をほとばしらせた、

まるで、小さな火山が火を吹いているかのよう。

——あるいは魔理沙の言う、星の最後の輝きがここに落ちてきたのかもしれない。

呆然とそれを見つめる魔理沙を、万が一にも飛び出していかないように押さえるにとり。

「近付くと危ないよ。温度がさっきの炉の比じゃないんだ。この反応でガスが発生しないから熱が連鎖的に上がるのさ。きつと摂氏三〇〇〇度を超えてるはずだね。太陽半個分くらいかな」

「……おお」

少女の返事は上の空だ。斜光用の黒眼鏡の奥からじつと輝きを見つめ、一時も視線を離そうとしない。きつと新しい魔法に使えないかなどと考えていることだろう。

反応が収まったところで、にとりはゆっくり立ち上がり、川面に手を差し入れて水をはじいた。一抱えほどの塊になった冷水が見事穴に飛び込んで激しい蒸気を吹き上げる。

「もういいよ」

「……なんだ、いまの」

「えーと、日本式製鉄法とかって言ったかな。前にうちの工房の親方が人間の技術者に教わったんだ。理屈は単純だよ。酸化還元反応を利用して、混ぜた金属アルミニウムが三価の鉄を単体に戻すわけさ。これで酸化鉄から純鉄を取り出せる」

数十年前、ふらりと外の世界から訪れたその男がもたらしたこの製法は、河童にとって驚きのものだったが——すっかり憔悴し

た様子の彼が言うには、この方法は欠陥だらけのものなのだというところしかかった。製鉄法などとうたっているものの、戦車一台をつくるのに飛行機百機を溶かすようなもので、まるで費用に見合わない詐欺同然のものなのだとか。

外の世界ではこの夢の製鉄法という触れ込みに、たくさん艦船や戦車を作って戦争をしたがっていた一部の政府高官が夢中になり、部下の止めるのも聞かずにいくつもの大きな鉄鉱炉を潰してまで強行しようとして大問題となったのだという。この騒ぎでいくつもの会社が傾き、たくさん役人の首が飛んだ。彼はその責任を負わされた一人であつたらしい。

その男がその後どうなったかまでは定かではないが——河童の大工房にはこうして、幻になったはずのその製鉄法がしっかりと伝えられた。

にとりは焼けた穴の底にアームを伸ばす。冷えた金属塊は持ちあげるとほろほろと崩れ、その中から鈍い銀色に輝く指先ほどの塊を覗かせた。

「これが純鉄。踏鞴を吹いたって手に入らない、混じりつけのない純粋な鉄だよ。ちよつとやさつとじや錆びないし、酸にだつて溶けなくなる。普通の鉄じゃ考えられないくらい柔らかくて良く伸びるし、絶対零度近くでもそれが崩れないんだ。これが、魔理沙の欲しがつた星の欠片さ」

黒く煤けた破片の中から、銀色に丸まった指先ほどの珠を拾い上げ、にとりは魔理沙の掌にそつと握らせた。

一見、大きな回り道のように思えても。無駄かもしれない努力を繰り返しても。星空を目指す普通の魔法使いの手にあるのは、きつとこんな形が相応しい。

満点の空の下、冷たい輝きを放つ星の欠片は。  
まだいくらか太陽の輝きの熱を残し、魔法使いの手の上でさら  
きりと輝いていた。

(了)

【参考文献】

愛知県豊橋市高師原台地から産する「高師小僧」  
名古屋大学博物館報告 Bull. Nagoya Univ. Museum No. 20, 25-34, 2004  
<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/handle/2237/7542>

とよはし高師小僧フェスタ報告書  
<http://www.toyohaku.gr.jp/sizensi/06shuppan/syuppan/syuppan-takashikozo.html>

千里眼その他 附記 中谷宇吉郎  
[http://www.aozora.gr.jp/cards/001569/files/53221\\_49864.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/001569/files/53221_49864.html)

銀河鉄道の夜（青空文庫） 宮沢賢治  
<http://www.aozora.gr.jp/cards/000081/card456.html>

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『くろがねの星乙女』は、魔理沙がにとりと一緒に悪たくみをしたり、星の欠片と称して製鉄をしたりする、当サークル三十一冊目のS本となります。

東方 project における聖地とも言える遠野での開催ということ、河童と星をテーマに遠野物語やら宮沢賢治やら何からなにもで節操無く盛り込んだ内容となりました。趣味全開の内容ですが、楽しんでいただければ幸いです。

今回の表紙には、七屋敷さん (pixiv: id=267759) の【フリー素材・背景】夏の星空と冬の雪原素材【テクスチャ】(illust: id=40387831) をお借りしました。この場を借りてお礼を申し上げます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

【奥付】

「くろがねの星乙女」

平成26年3月2日

東方紅楼夢 9.5 遠野物語

夢の世紀 魅知の旅

発行 折葉坂三番地

(<http://oru hazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の

「東方 project」の二次創作です。



